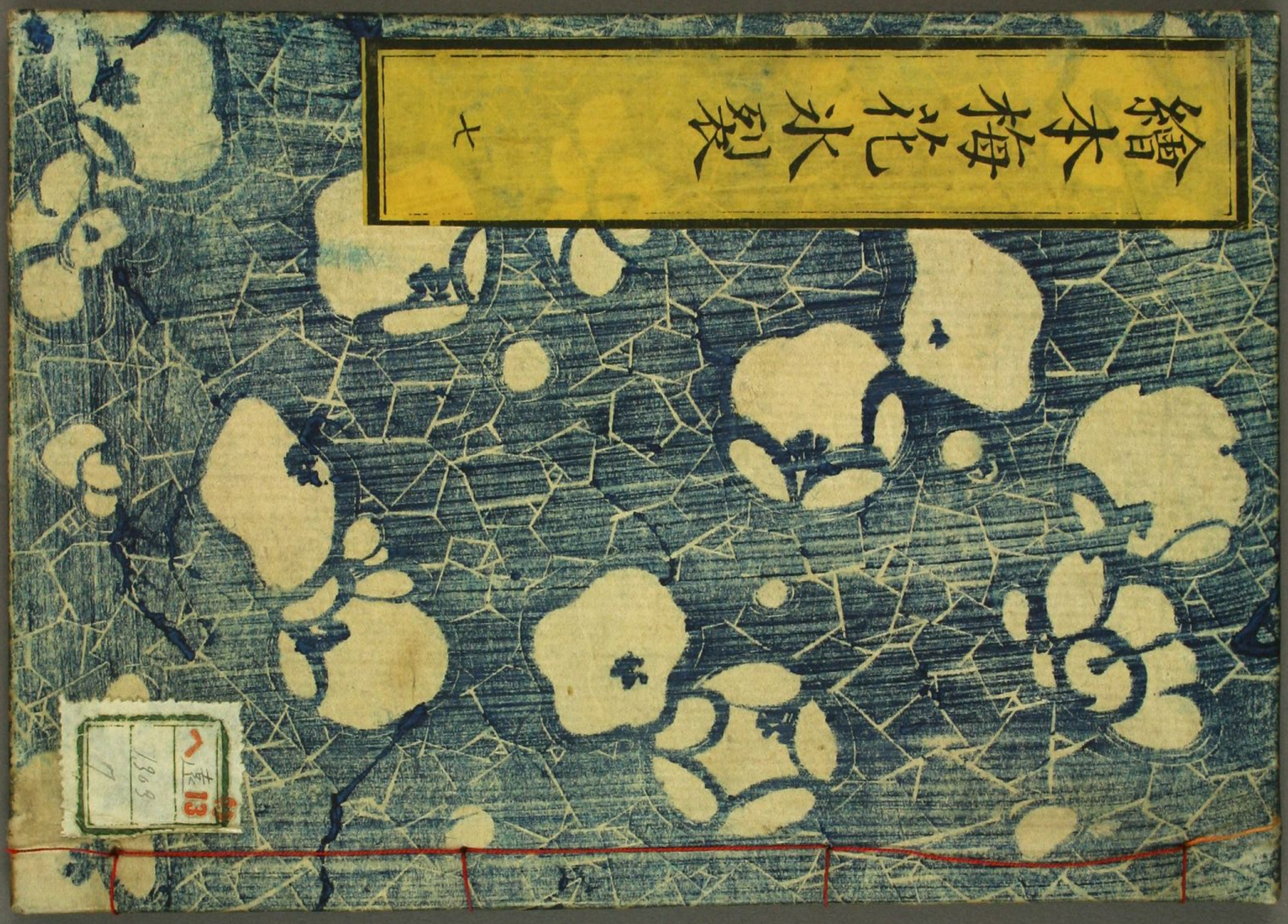
Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



武家を公に望しが竟に縁とそあれ。小串の家良唐琴ノ浦左門よ
仕へける後小串ハ父の貧苦を扶んと。十六の歳烟花にまぎみしが。
かゝる孝心を天の感應やあるひけん接女多くゝるが中に。雅みて肩を
ならぶる者もなく紅の全盛ありしハ幸なりとハいふものゝ又幸ひ
ならずや。爰に唐琴ノ瀧次郎ハ袖仗を繁ひ安房上総下総當陸の
間を往ありゝ爰に十日逗留して往き来るさの旅人
よりをつけくさぐりあけるに不図下総佐倉の町なる千本屋
作兵衛といへる逆旅に泊りけるが。袖仗ハ泊近き旅籠香取の
社へ詣ん。来らんといふに。打連れ瀧次郎ハ長途の労を厭ふやう
つれなくねどさるでの夜ふもあくねば未明して本望を達るふ

へ13
1303
7

祈願をとめんとて袖乞を為りし時は細くも共一箇彼の他
三湯が家ふぞ運営して居くりけるが上次郎の商人より猶多の孫
市といふもの又出来ハ鮮るまねどもまた国舎をト銭を奪ひとりくあ
つとく武士の浪人よ亀浦鬼平次といの二箇同じく這くの者共へ逆
問ことありけるが弥市ハ年毎より此国へ猶を買ふ来まべ必ず来ま
宣宿とまるこう又ト者鬼平次ハ者共へ来る者と
婦女がまるこう彼の鬼平次ハ色白く青髭ありて未三十余歳の
ある者ふて為るも無吉さるもうふ処彼れ之どもまた奥義を極る
こう自負まる時の曲者ありけまべ瀧次郎ハ仲ま倘ハ這奴
箕文太ふハあるぎるる早く袖乞飯まうと思ふまつけく逆と鬼

平次と親しく物語ひうハしまどこて宿子を窺ひける豊年
這鬼平次といふも男鹿山の魍魎の同類こして実名を火串の鬼
平次とよぶく原来ハ西国方の退糧ありしが為の赤所ある侍よ
竟よ白波流林の群よ入りまるぐよ容を変へ緒国を横行ます
胡麻蠅ありけり。瀧次郎弥市ハ形くふ志ず。鬼平次と他夏
こう交りけるが鬼平次ハ又我吉ま世浮世の雑沓花街都
巷の浪沓ふど虚称をまづくいとおうう物語ふどこて人の情を
むとびける然るふ此ふ本夏ふ一箇の娘あり名を小菊とよび。
今年二八の美をもつくく花とうぶ名の惜くぬ風情ふ所の美
疑ハ此ふ所ふ紅をうけざるもうく錦木の千束よあまり文王

章に思ひを述るもあまたゞ良人船宿をたのしめお花も心ならで
人なけれバ何方へも強面なくてありしけるに此程より瀧次郎が妾
に逗留せるあてなく前髪客にお花ハ人まねを思ひにあまへまし
けれどさすが處女氣のそれまで自地に言ひ兼て頼みの縁家を
ち教らしける彼亀浦鬼平次も不斗此娘に思ひをかけ何卒して
我手に入れバやと種々と工夫をめぐらしける折しも船橋舗
宮の祭禮とて妾ゟ是こりまでさゞめ祝く家毎に工ミを尽せし
燈籠をかゝげ酒汲かはしあどして三絃を弾し其賑ひいはん
かたなしかくてけれバ日頃お花に心を懸し破落戸彼ハ是幸ひと
竊に約び宮から今宵ハ夜宮を見物に出るべしくるみ所に

待伏してよろくかくらく日頃の思ひをはらさんと六七人言合せ。
待ともおらいず。お花ハ外孫らしけれバ婢女一人召倶し。そこよ
妾ともらへあろきて田甫をさしくらんとせるをこそあれ。
様く扨しる寝れバ村に名うての破落戸継摺玄間六本
古那の手古稼なんどよべる者をたのみとして。お花にところを
通の在あるくく人を積くろき岐縁まくハ金行の折まのごく。彼
上古代の科叫の文字とかるらんに似く讀むがくたも総書を送り
て挑みくる事五六箇むらくと立かさまくりどり泣母が
お花を宙にさてげく尚も寂しき方へ連れけれバ婢女ハ周章ま
どひ我家の方へ立返らんとせる道にてえーそく瀧次郎に初

遇ひしより。瀧次郎八幡宮に途の労をやすらはれど。今宵八幡
宮の礼の夜宮と因会人の集ふ彩樂の最長あるふ。おのづから病をも打
忘れて漫ろ外面ふ出うとせ家の灯燈彩燈の狂画ども見あろ
きけ。思ひもよらぬ遊ふ来りけるが最前ふ本座の娘婢女ふ向ひ
出彩しを出すべ婢女ふ向ひ見てハ娘子ともふ夜宮見物ふ往ひ
ものとおぼくしぶ出獨り飯りのふハ今娘ふハ先へ友達と彼ふ返りや
ものひしと問ふて彼の婢女ハ吐息つき答我を扶のくくと叫ぶ
ものぞ何ものやと云ね問ふて婢女ハ泪ぐらつあるとしてなぐも物
語ふ瀧次郎ハ大きふ驚ろ見婢へ暫待ば間遥留ふ家ふ入れば
とてかゝる事を聞きてよとべきふあらず我ふ問ハぬまでも往ふて

合浪を扶べ〜何方ぞと問ふ。婢女ハ彼を指さし。あまてる見
る庚申塚を左りふ見て暫の口より東の方の国角のうとへ連
行しぶ其後ハ走りもぐ〜ず。とぶもあくぎ瀧次郎ハ上を見て時刻
のびとく悪漢等ふたづらしめらまるべ。海ふとすもその甲斐あらじ。
お伴ふ云やく家ふ飯り来きの由を編ふ人ふ告ひ逃ひの人を
我しるとしひらけく尾〜つらげ。彼ふをさして走せ去つるあ。
瀧次郎ハ桶の口の方へ踏ん込ん変遷ふ逃るふ時ふ。
変ふ逃ふ走るつのくとんまべ案のごとく大勢の悪漢ども。
捕へまどり見どり張みどりぶ〜きふ。おのぶんとさるるまべ。
一幾ふもおぶ〜一箇の悪漢ハ禍髪つらんで倩へ住と投のけ

残る奴原ばかりなるとさのたまふ側
せば叶はぬなる世と迫まる月ず。世の
道路反逆ひるく。雲と霧と迸り
ける。龍次郎は起と扶け起し。
るもちろんと雅〜いざまくとうまを
よ。おの〜の縁くろめて龍次郎よ。今
青の雑兵を救ゑまし〜夏うまばい
ど晴〜く湖ぐらうまを今年龍
次郎を伐採し。城の武日頃妻が家
よ。病ってのあたれ名月盛

いくまるる耳ふそ物をぞたいひらせ〜
夏もさ紀妻が刺る雑兵を沒ひ見
ばいと晴〜ともあ雑さまも湖よ
尽〜がて〜今の悪漢ぞが狼藉
ふそ物ぞ疫のおとうとて一ト撃す
あるみがて〜。番時がおのごとを露
つ。分世その後寛ことそ踏ハ
ふ〜とおるよ。次郎もたと四世
月ふ世ば。妻よ古とる辻堂の形
指仏ふ様形ふ。ど度の雨ぎ〜よ

ゐりたるとこしに見るる一宇の草堂あり。とまとひとく龍次郎ハ。おもはず
彼の辻堂の樵夫を助け手負ひ脊をさすりなどゑ和ましるゐ。おの死ハ最
前ゐり手負ひ数多の人労せしを感じ龍次郎ハ。
思ひのたゆみなや。咳こだりゐ万ゐうくれば。龍次郎ハ作天し。
めゑ嬉中ゐり茶とりいだしふ〻まもへとまどそれや。歯をくひこ
ゐし休ま給ゐうく。薬を口中ゐろみくぐゑ口ゐに酌くさふくませ。
あゐりのあをくまにひとび来りとまもゆでこゐり口へうつし呑せ。
けるゐ。おゑハ目を開き完尓と笑ふ。龍次郎ハ大きゐ喜びおゑの
ゐ親ハよゑや快ハ一刻も早く安宅へ病へ送りとどけやべしとゐくち
ゑハ尚も苦ま氣よ尋く未瘧の全くとゐらぬゐ安ゐ出ばいと

重ゐるゐん徇生を強く押くゐハまとゐ。龍次郎ハ。
嬉くさし入るくそのゐをおつとりこめ氣よ。
備ハ我ゐ知ゐりて知ゐる正ゐ死進退ゐるゐと思へばいとく龍次郎ゐ
洪恩金に辞まゐがゐく竟ゐ為ゐ紅を殺ふく皆時が間辻堂の
家を明くゐ入ゐけるとまに巫山の夢をもとぶゐあゐ千ゐばゐゐゐず
鬱鬱の襖を重ねるゐゐん。鳴呼君子ゐ三戒ゐり。ゐゐさ紅
とまゐをいまゐもゐる夏ゐまゐありと龍次郎ゐ氣の過ちゐり。紅が
ゐゐ香ゐまゐゐ後意ゐ不憶災ゐかもするにいゐるゐゐべし。
第拾二齣　殺客商奪金
且説千本屋ハ。娘女ゐ〻せゐ大きゐ驚紅まゐ公作三湯をもとめ家

内の男せ三四箇捧千切木を推くつく走つ来りしが道ゆく龍次郎
おそを殺かく飯るふあくりしうべ作清が欲びたぐあれよ物ゆく早速
同屋して家ゆ飯り新ゆ酒肴を陰梅して龍次郎さそめ今宵の
楚を謝しけまば龍次郎も甚迷惑しいつでゝ屋敷おみをりふむる妻の
理ならや義を見ぬく せぎるは君子の常ゆりうぞりの妻をるせしとてきな
で紅を宣ふるうと固辞どいつぞ孕く管待しこまりしては一入龍次
郎をば心をつけくとでめけるかゝまけまば龍次郎も社及が赤飯ぬといひ
おそが表ゆ引さまこ考ゆ遊廓のうち夜毎こ婢女がくるまよおそが国へ
出びとりるに中とるりにける家ゆ又彼の悪者鬼平次は或夜更さけ
て飯りんこに龍次郎が家ハむゆしくゆぬけの蟬ゆこで荷物の紛事

を枕のあくりあそがひ人の寝るどくゆこ来ぬまとハ心ず
どゆ奥の方へ抜足して行りんるに娘が国とおがきおて何やらん密こ
噺の変ゆ成るに怪しやとそろと襖の間より窺きんまがとハいふ龍
次郎とおそと一夜具の中ゆ枕光景ゆ鬼平次ハ胸りし情
這小童いつしゆ娘と密通してありけるよゆ吾ゆをうけし女を人ゆ
魅せらるしとて安うゆねよしく我又一計をめぐらし涙ゆるに娘を
むくるでゆハと娘を絹をおしあづめまどくくと我寝所へ立飯りそ者ら
ぬふりして寝さりしがんの中ゆ思ふふとても殺龍次郎とかる
況あるうハ尋常の変ふくハ我心ゆハ従ゆまで呉ハ上ハ左斬を見
合せおそを豪奈して走らるゆハ者ゆを肚裏ゆ思案して蜜ゆ龍次

郎が包みのうちを開き常に持てる胴革入をうばひとり何食はぬ顔
にて原いどくまして居けれども龍次郎も何所へかおとせしものの
ゆくへとも捨おきけるゆゑ鬼平次又思ひけるは今お花を誘ひ紙とも
食痕とすりこの絵術をうらんに奈何よりもあく多分の金子を纏へ
と思ふ事ひ相稱る弥市はなや去年うり家敵へ貸おきる結
どもの價をあつめ去れ元三百金ばかり紙布よ入まく首よ盤の孫
其の日は故々へ立飯り又く冬の汐よ出まく来るうー龍次郎鬼平
次ふよも告げく別れの酒飲うはとよ鬼平次は出掛を吸そは最名
残おしき夏うる彩く此月頃同ふよ約束あるとーあの日ろまてんいと
知愛けまで故ふふくも待縋く出たべーと最行嶺よ四方

八方の物沿して夜はえく伏しぬかくく次の日龍次郎が奴僕社
助も立飯りしが思ふざる夏よりて眠どりしーを物沿るに龍次
郎は又鬼平次が夏を呼きやや長文太よりやと思ひ汝がくるを
待とびーといふよ袖次はつらく鬼平次がさるを見るにいくも一曲
ある藻とは月夜ぬまで長文太あくぎまびまと龍次郎よ若ぬ
長逗留せーうくは一刻も早く武蔵の方へ立越よ四畳どのよ面會
ふー其上ふく又とうふもとべーと立りよ催促ゆゑ不得よ出と
沢ある夏は袖次ふも言ひうねく強ーけまび明日とて出立せるる
其日は弥市が飯玉せといふ日と同日ふりけまび鬼平次は夏よ
たりとと仏中よりとび居ありける彩く弥市は夜深きよ起出く

仕度なとくの、鬼平次瀧次郎ほに眺れして立出ける頃ハ明け七ッ時なる
ふてやあらんとおぼしけれど是より旅に日を送る身なれバ
ことくもせず其場より小灯燈を提て本座をぞ出にける瀧次郎袖助
ら等ハ酸持身といひ殊に行先を急ぐ事なれもあらさまれバ實く發足せ
んとて跡に残りぬ鬼平次ハ此体所為をとくと見定めし小用を便し
に出るふりして路を走りひ追尺けるが漸く並木の松原の所へ出て見るに
遥先へ行火影ハ慥に彼市なりと追付さる物音もいはず後より肩
先深く切付とあくと云まくも尭且者ふりかへり何奴なれバだまし討とハ
ひきやう成と振と抜合せ一ぢ二ぢうち合しが初太刀の深手に詮方なく
終にあへなくなりにける鬼平次ハ大によろこび懐中を探し三百両を奪

取りとかねて盗みおきし瀧次郎が煙草入を死骸のそばへおとしおき仕合
よしと獨り笑傍を見廻せバ並松の小蔭にたゞ一人の立て居る体に悩し
何者なるやと刀提立寄あぐら是まなりしとよく見れバ人ならで石の
彫る地蔵の尊像なりけれバ鬼平次ハ疑ひ疑心ハ闇鬼を生じ
竹箒も怪と見る我まで濫行の是くずるなりけると深地蔵の心を
必ずも人にさかでうりひそと戯れけるた忽変あつく已ハいはねど我
いふなく宣ふ翔ま再悔り備ハ四下に人ありやと刀を備の鞘へ入
てさぐせどを後ハ松風ならで音のなかりし備ハあのまが心の迷ひ
。かゝる不思議もありけると立去らんとする折しも来かゝる二個の
旅客があなたひ近くなるまゝに見付られじと灯燈を切り落し暗

道を探り入りて奥の方に忍び入り我寝所の邊に居るを待つ程なく往く緒書を見へまさに俤人の口得る所を地蔵尊のものいひのごとく聞く夜話の一助とするの所なり或云武蔵谷堤なる吹上なる所の地蔵尊霊験あらたなりこれ武蔵唐土の小説の中に似たる事あり云へ柄とするものの意意趣を再あらための言ふといへる當時の人情を察へたる偶言なりと云へ這の寄なるべし明結姉題備も夜明く往来の人弘市が死骸を見つけ早速此由を縣令へ訴へけるに月番の役人弘市が死骸を検

たるに全く刀にて切殺しなりと見へたる所信中をあらためたる所なり明白なりけるに即時あるを盗賊を捜索すれども寄食せる人よりも昨夜を私方に泊りたるのみ今朝早く三一金を持来るを殺害せしなり三百金を奪ひ殺して立去りしものなるべし尚人をまぐるとそれぞれあるを探し求るに一箇の提燈を入のあるけるに縣令の役人弘市が家へ立出て汝は何を学んとやと問へば弘市はまことに月番なるに日頃新次郎が持来る遠方なるつと綿を俤ハ彼の品を盗賊ふく弘市が今朝早く大金を不持て発足せるを聞あとより已も出て両箇にて斬

盤一二百金を奪ひのゐるべし。理なる和日頃より國所をも委しく
語らざりといひ何の活業もなくて衣服なども相変わらず居る事を
ひとりね家来と見へし輩の久しく何方へか行てあるましも不審なり
渠といひ是といひ盗賊なるべしとたるべく龍次郎が女房を言
上あげまゐらせまゐとて全く盗賊なるべしと真さを組子を八方へつかはけ
者を探し求めけまゐ早時列うとりて龍次郎を捕ハ行方の道を
求くる事なまゐ絶えず遍く組子ハ空しく帰りぬ。
かくてけまゐ兵衛次郎はまた又一たびのうちふたゝび捕へ
らばあの紅を豪奪て去るべしとむをつけく窺ひける変を表を
とゞめしハ令娘お花が身の上なり頃より龍次郎と仮初の契り

けまゐ龍次郎も大なるをくへしと為まゐ。
ぶけ繼母の諸さまをとく国遠してあまゐ。
取るべしとまゐ紅ハいくへくお花を実とおろく居こゝ
おろらんや龍次郎ハ盗賊ハ市をとろ〳〵三百金を奪ひ追
者と渡あるふもあらまゐ昼夜泪ふのみうきくまゐ居こゝ
おうくても変る邪まるくと二世の契をむとび〳〵上ハ存命ありて
父母ハ孤を見ぬとりて〳〵ていさゞよき操をあらハすべし〳〵や
いろる悪人ハもせよまハまゐとハをさゞめ或歌とまぐ〳〵
と書〳〵自刃ハ伏してたるくりけるぞ是ハ〳〵家内の人
ハ知何さくお花が起出ざるを不審ふおもひ国房へ行て言ひいつ

に血をそゝぎ外に居てかく絶て父母ハ周章ふためき走り来り死
骸に取りつき何者の所為ぞと狂氣のごとく歎きさけぶ。かゝる家
内の男女も上を下へと騒ぎたちてとかくする内に夜も明けて遂に補亡の
何者かゝ書るものあるを見出し家ごとく遺書なりしと見るに
練や父母の恩愛を深く山よりも高きをしりて毎に思ふハ養
育の恩ハ海よりも深く此年月の養育の恩ハ報ひなく
しかも家督相続の身なれば身に代ても大
恩を報ひんとそくさくべうらず候かしこ
きかせうべくも候へども命ありてハ父母のさき
ぎりしかきうけるものもなきながらへかねて

かくまでわがまゝに帰りたるもしくきずさまのうし
身ハ元の漁夫なりいつぞやより遥に隔たる遠国の地に漂ひ
[illegible]方と互に船橋の神宮の祭り
[illegible]見えてもまた言ひ
[illegible]父上も上の目を忍びちぎりて
[illegible]ならんや [illegible]
[illegible]月をよそに[illegible]綠帯
[illegible]の黄金を[illegible]
[illegible]ふしく[illegible]世帯[illegible]
[illegible]胸を焦しさべき[illegible]父

[illegible]せ〜を天にあくみ[illegible]
たるふくめ〜んと思つきいとうれし〜[illegible]
あ〜思ひ[illegible]りの毒さ[illegible]の[illegible]
[illegible]〜入うもべきどう海ごひたく〜いうれる
夢の国を見分まん〜せんうういまを[illegible]
[illegible]〜べうさやしいと[illegible]まで[illegible]
筆[illegible]たるもずあうう〜[illegible]
たく〜[illegible]世の絵[illegible]
一色人の[illegible]を[illegible]

斯くきつくあるとけるば。彼主婦ハ見るとだるりハ[illegible]
りつ〜ら童のよう[illegible]思ひ居るが。瀧次郎どのと申〜[illegible]
うつ〜[illegible]見るとうりける。今ハ思へバ瀧次郎どのとあらいふ
とて盗賊をたくらくべき人ふつよあ〜す左人ハ見つけ[illegible]ぬと[illegible]
[illegible]ハ[illegible]あるものハ必面体[illegible]ハ[illegible]ざる[illegible]加之盗賊をた
たらくかどるゝバ。浪[illegible]案内させく我家の物をも盗まんとうる
もう死を思へバ彼等ハ俱不裁天の族[illegible]ん[illegible]もたり雑〜[illegible]
盗賊ゆ〜んと縣令へ言上せ〜ハ[illegible]ま〜け[illegible]を引らへ今ハ返
[illegible]てあるト者鬼平次と母[illegible]ん[illegible]面魂の[illegible]者[illegible]ずあるのみ。

折く隠中物衣服の類を旅客の奪る体なるべし。道を往来せ
ば娘が仇をとり。龍次郎どのと申しんが濡衣を干れるるるもふしも
あしざるべしと考へ鬼平次が居る座敷へいそり見るに鬼平次は此
強動を聞くく打角出し娘おの死自害せしうへは老君をも
怪み〻と荷物を取り去らんとする体ゑ偖こそ爰を逃出
とせるハ塗紙を掠まりとこの年頃ぶり詐ども大勢六尺棒をもつて
取りこめば鬼平次ハ一生懸命と庭へ飛びおり。傾来物を共に向ふ
かざしゝ。ならば斬られと身ハ〻とり此勢ゑ屈死者きしに思遠巻して
ぞ扣へける。その内ゑ人組ハ鬼平次が荷物をあらゝ見
案のごとく紙布ゑ入まるまゝ。二百両の金子ありけるゆゑ偖こそ鬼

時ゑ徳寺へ行へけるハ。徳寺の組子大勢十手をふりあげく鬼平次を
捕め取らんとひしめ犯しゝ。ば。ゑ思ひけん龍のごとく家根へ
飛あがり。後ゑ引ゑ手をもまずゑりふけるかゝとけるハ経術なく近
々近在を姿絵をもつくもら絵美せしうとゑ引ゑ手ハ者ゑ
けるに形くこの年頃失踪ハ由くりる見真ゑく女をうしゝ見ん今ハ家
紋も何ら世ゝと失踪緒共髪をおろし疑似の某へ脱式を高つり法華の
霊場を順拝し娘く菩提を弔ふ具ハ龍次郎ゑめぐり遇るもあるべ
ゑ死が貞操の死とも物ごとらんと何所をあてどく考へぬ旅路ゑ
ひきれと考へ先上州猿屋の歴市ゑ方へ先達く行へ世ハ練
の敵ゑ思ひ今度云の夏ゑ実の敵ハ鬼平次といふものゑ

よゝと告げ越せしゝたる跡市ら想慶へ何方へ行しや 三五ずとの
夏の色ハ往方ろく。その侭まくしてち手拭おきね。

梅花春水巻之一終